

学を学ぶ月刊誌  
hichi

昭和51年8月16日第三種郵便物認可  
平成28年10月1日発行  
毎月1回1日発行 通巻第496号  
2016 November



致知 十一月号

十一月号 通巻四百九十六号  
昭和五十二年八月十六日第三種郵便物認可  
平成二十八年十月一日発行(毎月一回)日発行

編集人 藤尾秀昭

発行所 致知出版社

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前4-24-9  
TEL(03)37962111



時計の品揃え、世界最大級！  
[タカシマヤ ウオッチメゾン 東京・日本橋]は、  
誕生1周年を迎えました。



世界のトップブランドから、日本で初めてご紹介する希少品まで、85ブランドを多彩にラインアップした時計の専門館。  
ごゆっくりご覧いただけるいごちのいい空間。お品選びには専門のスタッフがお手伝いいたします。

1,100㎡、国内最大級のフロア！  
[タカシマヤ ウオッチメゾン 大阪]が  
11月3日(木・祝)オープンします。



大阪タカシマヤ5階にラグジュアリーな空間でオープンするウオッチメゾン。フロアにはブティックスケールで展開する11のプレステージブランドを核に、厳選62ブランドがラインアップ。関西の時計の聖地が、待望の誕生です。

自分にとって理想は、良き理解者を見出して、どうして私たちが生きる意味があるのかということ

若い頃から陶芸家を目指してい

急転直下の一か月

生まれすぎてすぐに脳に酸素が届かないという原因不明のトラブルに見舞われた梨穂。それによって体の自由はおろか言葉を話すことさえ奪われてしまった梨穂は、生後僅か一か月にして最重度の脳障害児となつた溝呂木梨穂さん。体の自由を奪われたばかりか言葉を発することさえできない梨穂さんだったが、娘にも必ず言葉があると信じ続けたのが、母・眞理さんだった。「娘のために」闘い続けてきた母と、沈黙の世界で「生きる意味」を求め続けてきた娘。そんな母娘の歩みから、「闘魂」の二文字が浮かび上がってくる。

それでも私には、梨穂の中にちゃんと意思や思いがあることをひしひしと感じてきました。梨穂にはきつと言葉がある。だから何とかしてその言葉を引き出してあげたい——その一心でした。それだけに長年抱いていた思いが叶った瞬間、鳥肌とともにえもいわれぬ喜びが体の中を駆け巡りました。しかも驚いたことに、梨穂の中には実に豊かな言葉の世界が広がっていたのです。梨穂の言葉を引き出してくれたのは、國學院大学教授の柴田保之先生でした。柴田先生はこれまで「言葉を持たない」と思われてきた重度障害者から言葉を引き出してこられた方です。独自に開発されたスイッチを通じて、パソコン画面に次々と打ち出されていく梨穂の言葉。人によって最初はなかなかスムーズに言葉が出てこない方もいらつしやるようですが、梨穂の中からはまるで溢れ出るように言葉が生み出されていったのです。

私に言葉があると、なぜわかったのですか？ ご覧の通り、何もできない私ですが、ぼんやりと生きてきたわけです。ずっと、私は人間とは何なのかということ、考えてきました。理想をそのまま語ると、私にとって私の生きる意味は、私たちのような存在でも生きる意味があるのだから、どんな人にも生きる意味があるということ。楽な人生ならそんなことは考えはしなかったでしょうね。でも、こうして私は、ぼんやりとは生きてこれなかったもので、わざわざそういうことを考えてきました。なぜ、私に生きる意味があるのかというと、黙ったままの人生でも人は希望をもって生きられるというのを証明できたからです。なかなか信じられないかもしれませんが、私は希望をなくしたことはありません。小さいころからずっとお母さんに、たくさん愛情を注いでもらいましたから、私はとても幸せです。

た私は、二十七歳で結婚はしたものの自分の将来のことで頭がいっぱいで、子供のことは全く考えていませんでした。ところが三十歳を過ぎた頃、婦人科検診で卵巣腫という病気が見つかったのです。「もう結婚をされてから何年も経っているのだから、そろそろお子さんのことを考えてもいいのではありませんか？ でも、それにはまず病気を治すことが先ですね」女医さんの一言に、私の心は揺れ動きました。一生子供を産まないと考えていたわけではなかっただけに、病気になることがきっかけで子供のことを本気で考えるようになったのです。以前から興味があった自然療法で治療に臨もうと、自然療法の大東・東城百合子先生の指導を仰いだところ、僅か半年ほどで完治。私のお腹の中に梨穂が宿ったのは、それから間もなくのことでした。出産は自然分娩にしたい。そう考えるようになってからは、とにかく夢中になってお産の本を読んだものです。一つの命が生まれ、そして出産に至るまでの過程は感動的で、勉強すればするほど自然の力のすごさに感激したことを思

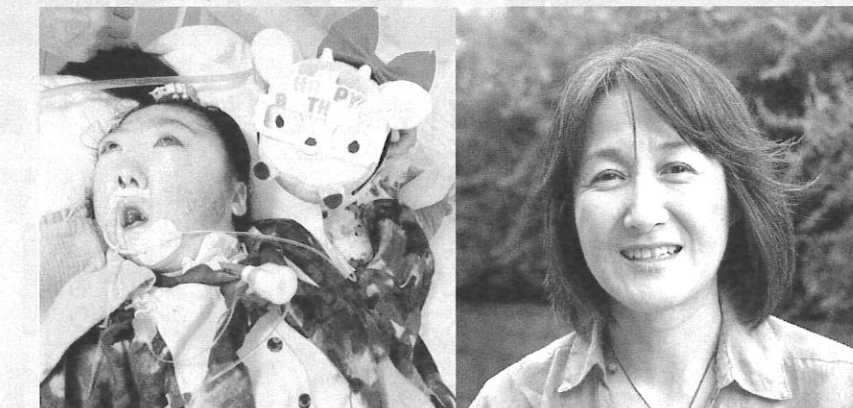
生まれすぎてすぐに脳に酸素が届かないという原因不明のトラブルに見舞われた梨穂。それによって体の自由はおろか言葉を話すことさえ奪われてしまった梨穂は、生後僅か一か月にして最重度の脳障害児となつた溝呂木梨穂さん。体の自由を奪われたばかりか言葉を発することさえできない梨穂さんだったが、娘にも必ず言葉があると信じ続けたのが、母・眞理さんだった。「娘のために」闘い続けてきた母と、沈黙の世界で「生きる意味」を求め続けてきた娘。そんな母娘の歩みから、「闘魂」の二文字が浮かび上がってくる。

夫の立ち合いのもとに行われたお産も大変素晴らしいもので、この時の体験は生きる原動力になったと言えるでしょう。無事にお産を終えた私は、このまま梨穂が元気にすくすくと育つのが当たり前だと思っていました。ところが、それから時を置かずして、ありえないようなことが次々と梨穂を襲ったのです。新生児黄疸の治療のため、大きな病院で治療してもらったのは出産後三日目のことでした。経過もよく、すぐに家に戻れたのですが、それも束の間、ミルクを吐き出すなど梨穂の体調が思わしくありません。再び病院に駆け込んだところ、今度は血液中のビリルビン値が上昇し、脳細胞が侵される核黄疸に罹っていると判明しました。確たる原因も分からぬままに光線治療や交換輸血といった応急処置が施されること約二十日。「ようやく症状が落ち着いてきたので、来週には退院できるでしょう」という医者の言葉に、ようやく安堵の思いで眠りにつけたものの、翌朝病院からかかってきた電

言葉は自分たちを表現する武器

チャレンジドハート代表 溝呂木眞理

生後一か月で最重度の脳障害児となつた溝呂木梨穂さん。体の自由を奪われたばかりか言葉を発することさえできない梨穂さんだったが、娘にも必ず言葉があると信じ続けたのが、母・眞理さんだった。「娘のために」闘い続けてきた母と、沈黙の世界で「生きる意味」を求め続けてきた娘。そんな母娘の歩みから、「闘魂」の二文字が浮かび上がってくる。



今年24歳の誕生日を迎えられた溝呂木梨穂さん  
みぞろぎ・まり——長野県生まれ。子供3人の母。東京デザイナー学院陶磁器科卒業。平成4年長女の梨穂さんを出産。平成24年小冊子『私の私らしさを見つけたよ』を製作、チャレンジドハートを立ち上げ、講演活動を始める。27年梨穂さんの詩集『らりるれろのまほろ』(OfficeOharada)を出版。

私の生きる意味  
みぞろぎまり——  
言いたい気持ちがあります。びっくりして夢のようです。長い間、待ち望んでいました。

私に言葉があると、なぜわかったのですか？  
ご覧の通り、何もできない私ですが、ぼんやりと生きてきたわけです。ずっと、私は人間とは何なのかということ、考えてきました。理想をそのまま語ると、私にとって私の生きる意味は、私たちのような存在でも生きる意味があるのだから、どんな人にも生きる意味があるということ。楽な人生ならそんなことは考えはしなかったでしょうね。でも、こうして私は、ぼんやりとは生きてこれなかったもので、わざわざそういうことを考えてきました。なぜ、私に生きる意味があるのかというと、黙ったままの人生でも人は希望をもって生きられるというのを証明できたからです。なかなか信じられないかもしれませんが、私は希望をなくしたことはありません。小さいころからずっとお母さんに、たくさん愛情を注いでもらいましたから、私はとても幸せです。

我が子の成長を願うのが親という

希望の光とともに

徐々に自分の中で折り合いがつき、病院側とよい関係を築けるようになったのは梨穂が十歳を過ぎたからのことでした。

どれだけ重度の障害があっても、

希望の光とともに

二歳遅れの八歳で梨穂は特別支援学校に入学を果たしましたが、

詩が生まれたのです」

孤独がもたらすもの

柴田先生が訪れる度に、梨穂の詩が毎回三、四篇とたまっていくうちに、私はそれを一冊の詩集に

詩が生まれたのです」

孤独がもたらすもの

「言葉こそ自分たちを表現する武器」、そう語る梨穂の言葉に対する感性は、我われが想像する以上に敏感だったのです。

常に死と隣り合わせだった梨穂さんを優しく包み込む母・眞理さん



話には息を呑みました。「梨穂ちゃんの呼吸が止まっているのを発見した」と言うのです。あまりに突然のことで、気が動転しそうな自分を抑えつつ病院に辿り着くと、そこには何本かの管を通され、人工呼吸器に繋がれた梨穂がいました。「もう助からないかもしれない」。医者からそう告げられた私は、もう何も信じられないという思いを抱きながら、ただただ梨穂を見守ることしかできませんでした。

の脳障害児になっていたので。そしてちょうど出産から一か月が経ったこの日から、私たち家族にとっての本当の闘いが始まったのです。

すべては娘のために

死ぬかを何度も繰り返してきました。三歳の時には、心臓が止まってしまうこともあったくらいです。死と隣り合わせの梨穂の生きる姿を見つめる毎日でした。

で二十歳になったお子さんがこの病院にいる」と医者に言われた時には、二十年という歳月にのけぞるような感覚に襲われたものです。おそらくただじっとしているだけでは、落ち込むだけだったでしょう。とにかく行動することが、自分を支える力になってくれたのです。

# あの松下幸之助氏の座右の書

石田梅岩『都鄙問答』

ichidabaiigan:tohimbondou

現代語訳：城島明彦

全文をとことん  
読みやすくしました!  
227分で読めます

いつか読んでみたかった日本の名著シリーズ⑭

致知出版社

平成初の  
現代語  
全訳

- 「悟る」とはどういうことか
- 主君に仕える臣の心得
- 「いい買い物をした」と思われる商品を買売
- 親孝行とは何か
- 文字を離れて考察せよ

経営の神様・松下幸之助氏が「経営に行き詰まったり、仕事に悩んだら読め」と勧めていた座右の書。石門心学の思想を平易な問答形式で説いた幻の名著がいま甦る!

いつか読んでみたかった日本の名著シリーズ⑭

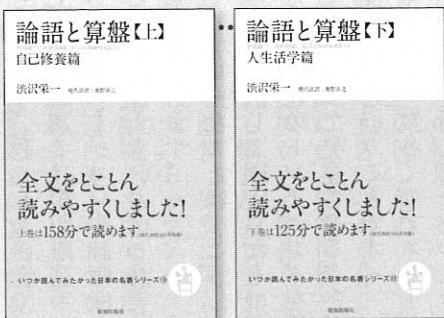
## 石田梅岩『都鄙問答』

現代語訳＝城島明彦 定価＝本体1,600円＋税／四六判並製

大好評!! いつか読んでみたかった日本の名著シリーズ⑬

### 論語と算盤 [上] 自己修養篇 [下] 人生活学篇

渋沢栄一＝著 現代語訳＝奥野宣之  
各巻・定価＝本体1,500円＋税／四六判並製



◎お求めは、巻末のFAX用紙または致知オンラインにて。お問い合わせは致知出版社 TEL 03-3796-2118 (直通)

致知オンラインで検索

## 特集 闘魂

柴田保之氏が梨穂さんの言葉を引き出す様子



したいという思いに駆られるようになり、居ても立っても居られなくなりまして。二十年以上療養病棟で暮らしてきた梨穂のためにも、梨穂から生み出された詩を世の中に出したい、そう思ったのです。 紆余曲折はありましたが、当時約四十篇あった詩の中から二十二篇を取った詩集『らりるれるるのまほう』ができたのは、平成二十七年二月のこと。そこには梨穂のお気に入りの詩「らりるれるるのまほう」が取り上げられていた。

「梨穂さんの詩の特徴の一つは、孤独がもたらす底なしの深い闇を、透徹したまなざしで見つめているところにある」と評してください。 たのは柴田先生でした。 梨穂もまた、孤独に関してこんなことを言っています。「自分は在宅の障害者のように年がら年中家族の愛を受けることはできない。お母さんが帰ってしまったら、待っているのは夜の病院の孤独。こ

う」が取められており、その中にはこんな件があります。 よい報せを私はずっと煉獄の底で待っていた／よい報せはなかなか届かず／呼んでみようとしても／喉は凍りついて／誰にも声さえ届かなかった 私には煉獄の底にいて／ただ私の心の奥に住む／本当の私だけを見つめて生きてきた／どこにも救いさえ見つからず／何を頼ればいいのかもわからないまま生きてきた 律儀な私の耳にいつも希望をくれたのは／らりるれるるの美しい響き／らりるれるるは魔法の響き 私にはらりるれるるという響きを心の糧に生きてきた

の孤独に一人耐える中で、研ぎ澄まされ、詩が生まれた」と。 もっとも、梨穂はこうも言いました。自分は本当の孤独は知らない、と。なぜなら精神病棟に入られて部屋には鍵を掛けられ、親にも会えないような本当の孤独を味わっている人に比べれば、自分の孤独なんてちっぽけだからだと言っているのです。 いい詩を書きたい、それが梨穂の願いです。でもそれは何も自分のためではありません。 梨穂は、柴田先生という自分の言葉を通訳してくれる理解者を得ることができました。ところが、世の中には梨穂のようにき理解者に出会えることなく、心の中に言葉を貯め込んだままの障害者が多く存在します。そして、何一つ自分の思いを伝えられないままに亡くなっていった仲間もいる。 いま、梨穂はそうした仲間たちのためにも詩を書き、重度の障害者にも言葉があることを発信しているところとしていっています。 私は長い間、生きる意味を探してきた／なぜ、私は生まれてきたのだらう／なぜ、私はいまここで、病院の中で、静かに生きていくのだらう きっと、その答えはだれにもわからない／いま、少しづつわかりはじめてきた 私はどんな姿だった／どんな不自由な体だった／ちゃんと言葉がある／ちゃんと心がある／そういうことを伝えにきたのかなあと、最近思う